



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	「精神障害を生き抜くとはいかなることか」を多様性にひらく : 第3報 高倉さんへのインタビューから
Author(s)	松田, 康子
Citation	臨床心理発達相談室紀要, 4, 37-56
Issue Date	2021-03-25
DOI	https://doi.org/10.14943/RSHSK.4.37
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/81063
Type	departmental bulletin paper
File Information	05_2434-7639_4_37-56.pdf



「精神障害を生き抜くとはいかなることか」を多様性にひらく 第3報 高倉さんへのインタビューから

松田 康子*

Open to diversity: “How does a survivor’s story on individuals
who have experienced mental health issues, trauma, and extreme states mean?”

—Third Report: An interview with Takakurasan—

Yasuko MATSUDA

要 旨

本論は、「精神障害者は病や障害をいかに生きているのか」という研究の主幹となる調査の一端を報告するものであり、第3報となる。本研究は、精神障害を生き抜く「高倉さん」の生きられた経験に学ぶ事例報告である。方法は、非構造化面接を用いたインタビュー法を用いた。本研究は、一人一人のユニークな「生きられた経験」を聴きとり、語られた物語から「多様性を認め」合うケアの視点を考察することを研究目的としている。つまり、ケアの担い手として応答せずにはいられない、物語の発見にある。高倉さんは、『一生に誰でもいろんなことがあって、不幸な経験はあるものだから仕方ない』といって『割り切ろうとする』生き方をしていた。自分が弱かったからと病気の原因を自分に帰結させる不動の物語を紡ぐ高倉さんにとって、生きていくなかで経験してきた精神病・精神障害は、己を貫く表現形であり他者（環境）とのつながりを保つ方略とも捉えられた。また、「当事者同士じゃない」という生きられた経験からは、ケアの原点ともいえる応答責任が教示された。

キーワード：多様性 精神障害 生き抜く 質的研究

Key words: Differences and Diversity; Mental health issues; Trauma; Extreme states; Survival; Qualitative research

1. はじめに

本論は、「精神障害者は病や障害をいかに生きているのか」という研究の主幹となる調査を報告するものにて、第1報、2報に続く論考である(松田2019, 2021)。調査は、一人一人のユニークな「生きられた経験」を聴きとり、語られた物語から「多様性を認め」合うケアの視点を考察することを研究目的としている。ケアの視点とは、教科書にあるような模範となる解答を記

* 北海道大学大学院教育学研究院教授

述するのではなく、ケアの担い手として応答せずにはいられない生きられた経験の意味の発見にある。

日本の精神保健福祉が、入院生活から地域生活へと舵をきり、拓かれていったといわれる一つのメルクマールに、1987年精神保健法、1995年精神保健福祉法施行がある。現在にいたるこの30年余り、つまり平成時代を生きてきた精神障害者のかたがたは果たしてどのような暮らしを、どのような経験をされてきたのであろうか。一方、表向き地域移行が整ってきたとはいえ、地域生活へと舵をきったはずの年月においてもなお、入院生活が長期に渡った方々もいる。ETV特集「長すぎた入院」で取材をうけた伊藤時男氏の存在は記憶に新しい。精神医療国家賠償請求訴訟研究会は日本の精神医療を変えるための活動を2013年から開始し、2020年9月30日に精神医療国家賠償請求訴訟を提訴するに至っている。伊藤氏はこの訴訟において原告の一人となっている。

現在に至る30年余り平成の時代を、地域で、または病院で生きてきた一人一人の精神障害者の経験は、ケアの担い手にとっても埋もらせてはならない貴重な経験といえる。訴訟を起こし国の不作為を問う変革に向けた活動の足元にも及ばないが、いまこそ彼らの経験を収集し、ケアの担い手として学ばなければならないと筆者は考える。そうでなければ、精神障害者が多様性に開かれ、地域に暮らす日々がさらにまた遠のいてしまうかもしれない。新たな景色をみることなく、職業生活を終えることになってしまうかもしれない筆者の最後の務めとして、一人一人の物語を丁寧に扱うことを志し、インタビューという方法を用いた一事例報告を積み上げていくことは責務であると認識している。本論は、その第3報である。

2. インタビュー調査概要

2.1. インタビュー調査の目的

研究目的を松田（2019, 2021）より以下に引用する。

インタビュー調査の目的は、第一に、「当事者が精神障害を抱えて生き抜くとはいかなることか」という問いに基づき、地域生活において精神障害を意識する（させられる）とはいかなることか、その生きられた経験の意味を探求することと設定した。さらに、第二の目的として、「多様性を認め」合うケアの視点、つまりケアの担い手として応答せずにはいられない物語を発見することとした。

2.2. 研究方法と分析

2.2.1. データ収集

データ収集法はインタビュー調査とした。インタビュー方法は、文書にあるテーマと共に、「暮らしの中で、関わりの中で病気を意識する（させられるとき）、しないときについて、自由にお話をしていただきたい」と調査協力者に投げかけ、あとは、その場の流れ次第でインタビューが展開する非構造化面接である。今回インタビュー調査に応じてくださった高倉さん（仮名）との面接は2回にわたって合計約2時間行われた。1回目は、上記の問いから始まるインタビューを行い、2回目は、1回目のインタビューの内容を読み上げながら内容を確認する作業において、インタビュアーが自発的に話し出す物語を聴きとる方法をとった。

2. 2. 2. データ分析から結果記述まで—調査事例研究法—

データ分析は事例研究法を用いた。分析の手続きについては、松田（2021）が記す方法に従った（以下、調査事例研究法とする）。本稿では、調査事例研究法におけるデータ分析から結果の記述手続きまでを加筆する。

図2に記した①から④まではすでに、全報告で記した通りである。⑤に関してインタビュー結果を記述する際には、前置きがある。つまり、大前提としてフィールドの紹介やフィールドへの調査依頼、研究協力者への調査依頼をするまでのエピソードや背景情報を記すということである。さらに研究協力者のキャラクターや雰囲気が目に浮かぶように叙述することも重要と考えている。これらの叙述は、フィールドに訪れる度に記しているフィールドノートが元になる。記した叙述文の掲載に関しては、研究協力者やフィールド調査を承諾してくださった理事長へ前もって承諾を得ることは言うまでもない。そのうえで図と地というならば、図にあたるインタビュー結果を、インタビューの時系列に沿って記述するのが結果である。

NO.	分析データ1	コード	NO.	1、感じていたこと、 2、感じたこと	NO.	分析データ2	コード	No.	1、感じていたこと、 2、感じたこと

図1 分析シートサンプル

- ① 分析データを精読した上で、ワードファイル上で一つの出来事（意味単位）ごとに改行で区切りを入れる。
- ② ワードファイル上の分析データを図1に示す分析シートにコピー＆ペーストする。
- ③ 出来事（意味単位）ごとに区切った分析データが一つのセルに表示しきれない場合は、セルを分けて表を整える。この作業の際にも、分析データの区切りについては再検討・再修正をする。
- ④ 分析データを精読しながら、それぞれの出来事（意味単位）にコード名をつけていく。この際にさらに分析データの区切りについて再検討・再修正をする。分析データに記された「1、感じていたこと」に関しては、別の列のセルにコピー＆ペーストする。さらに、出来事（意味単位）の区切りをつけコード名をつける作業を通して気づいたことは、「2、感じたこと」として同じ列のセルに記す。
- ⑤ エクセルに保存された分析シートをもとに、ワードへ結果を記述する。

図2 データ分析から結果記述手続き

記述する際に留意することは、インタビュー全体を通したストーリーを意識し精査しながら書き進むところである。土居（1992）は、面接において「患者の話をあたかもストーリーを読むがごとく、聞かねばならぬ」と述べ、「小説の読者が主人公の運命をプロットを通して理解するのと似ている」と例えている。インタビュー結果を記す際も同様の営みがもてめられている。この文脈にあるプロットとは、区切られた出来事（意味単位）を指す。インタビュー結果では、区切られた出来事（意味単位）たちがある筋をたどりながら編まれていく、その筋を読み込みながら流れを損ねぬように編集し、厳選された印象深い分析データを一部引用しながら

綴っていく。筋を読み込む際に、その場で調査者が感じていたことや発言したことが参照に値することも起こりうる。結果にそのまま引用することもある。

こうして、調査者を相手に二者関係において語られたインタビューの結果は、論文執筆という段において、改めて調査者を媒介し二者関係の言葉のままに開示され、第三者である一人一人の読者に届けられることになる。

2.3. インタビュー調査実施までの道のり

2018年に本研究計画はスタートしている。調査実施に至る道のりは、拙著に記したとおりである（松田2019）。インタビュー調査を依頼する拠点としたNPO法人精神障害者回復者クラブすみれ会が運営する地域活動支援センター第一・第二を利用する方々は、筆者がインタビュー調査を継続していることをほぼ全員が知っている。1年間で1～2人という遅々たるあゆみであることもご存知なようで寛大に見守ってくださっている。ご協力いただける方々には全員、調査をご依頼しようと計画しているが、ご依頼は年齢の高い順にすることを原則にしている。また、お忙しそうにしている指導員の方々は今のところ調査依頼を遠慮している。

この間において1点、当初の研究計画にはない大きな変更がある。研究倫理上の配慮として研究依頼書に記した匿名化作業に関し、フィールド名称の匿名化はせず、実名にしたことである。理由は、研究協力者の生きた証が本フィールドに宿っていると思えてならないからである。本フィールド名称は、全国的（国際的にも）にも知られる看板である。調査協力者の方々にとっては誇りでもあるように筆者は感じている。仮称にすることは、それを削り取ってしまいかねない。これでは、研究協力者が特定されるリスク回避策が、研究協力のデメリットを生み出し、メリットを上回ってしまいかねない。そう判断したからである。ここで、研究協力者やNPO法人理事長の承諾を得たことは言うまでもない。

2.4. インタビュー調査を依頼したフィールドについて

前述した通り、インタビュー調査はNPO法人精神障害者回復者クラブすみれ会（以下「すみれ」とする）が運営する地域生活支援センターを拠点として行った。「すみれ」に関する歴史やフィールド紹介は、報告をするたび記してきている（松田2019, 2021）。したがって、全体的な歴史や紹介は拙著に譲り、本論では、脈々と「すみれ」の活動に息づいていると感じられる、じぶんについて綴ること・語ること・主張することについて絞り込んだ紹介をする。

「すみれ」は1970年北海道立精神保健衛生センター社会復帰学級卒業生4人でスタートし、2020年で50周年を迎えた。1970年に活動を開始した「すみれ」は、当時の社会復帰学級卒業生が多く利用していった。現在に至るまでに、「どっこい俺らは生きている」と言う表題で、20周年記念誌（1990年発行）、パート3が30周年記念誌（2000年発行）、パート4が40周年記念誌（2010年発行）、そしてパート5が50周年記念誌として発行された（2020年発行）。この記念誌には、それぞれに会員および関係者が名を連ね、節目節目における思いが綴られている。また、「すみれ」にはこれら記念誌のみならず、会員が日々の思いを綴る投稿原稿を掲載する通信、「すみれ会便り」を毎月発行している。2020年12月時点における最新号は、通算570号となっている。

このようにじぶんについて、または日々感じ考えていることを綴ることは「すみれ」の活動

において切っても切れない営みとなっているように筆者は感じている。

本稿ではそのきっかけではないかと推測される活動について紹介をしたい。

50年以上前のことになるが、北海道立精神保健衛生センター社会復帰学級（当時の名称）におけるプログラムには、「集団話し合い」に「作文」が併記、実施されていた。この社会復帰学級の概要について安達（1983）は、「集団話し合い」の狙いを「援助者の無条件に受け入れる寛容さの中で、集団のメンバーが自由に率直に感情を表現できる雰囲気の中に、人々と互いに共感し合い体験の話し合いから、（中略）現実の自己を見出すこと」と述べている。そして活動で学級生（利用者）が記した「作文」を紹介することを通して、学級生（利用者）の生き方を提示している。「作文」は、毎月1-2回ずつ組み込まれており、「自分について」・「生活について」・「家族について」という3つのテーマを提示し、書く際には、その他のテーマでもよく、書きやすいものから自由に選べるようにしていた取り組みである（安達1974）。「よだかの星」の読書感想文を書いていたことも記されている。安達は、この「作文」を通して一人の学級生（利用者）の成長過程を記している（安達1974）。安達は、学級生が「作文」において、最初は「手紙形式」で、後に「3人称形式」で、最後には家族について（つまりは2人称といえるだろう）記すなかで自分についてより表現するようになっていった変化を報告している。

残念ながら、「作文」という活動の意味に対する安達の論考は見当たらない。安達のことをよく知る「すみれ」理事長は、「これ、良いから書けー」と、ある利用者に安達が「作文」を促していたことを覚えているという。そして「社会からはじかれた僕たちが、自分で言いたいことをいえる」、「自分を表現すること」を大切に思って、「作文」にこだわっていたんじゃないかと付け加えた。

この「作文」は先に引用した「集団話し合い」の営みがベースにあり、自由に率直に感情を表現でき、受け入れられる寛容さのもと語りかける相手があって成立したものと推測される。すぎた推論とはなるが、まるで「生活綴方」の実践を彷彿とさせる過程がそこにあるような連想を広げるのは筆者だけではあるまい。

社会復帰学級の卒業生が多く利用していた「すみれ」の会員は、本センターのこの「作文」の活動を通し、精神疾患を患うことで抑圧してきた言葉たちを目の前の人に向けて解放してよいことを、まさに経験していたのではないかと筆者は考える。これが「すみれ」において語ること・綴ることへの活動の原点となり、継承されていったのではないだろうか。

拙稿（2021）の内容確認をした際、現理事長は、期せずして「すみれ」の歴史を語り出した。

年に一度の定例開催となっている「われらが主張大会」は、開催初期、テーマはなく、「メンバー交流会」を実行するなかで、企画のアイディアが湧いてきて「自分のことを言えたらすごいことになる」って相談しあったのちに辿り着いている。理事長曰く「最初は、自分たちのことをしゃべるしかなかったんだ」。「どう生きてきたか」、それぞれの生い立ちなどが語られていく大会だったようだが、公募をしても語り手が現れず、クチコミで話者を依頼したりして開催してきたという。この時の言葉は、仲間へ、目の前のあなたへ向かっていたように筆者には思えた。

前身となった「メンバー交流会」こそ、仲間同士の語り合いそのものであったと筆者は想像する。そもそもこの交流会は開始当初、公的な施設を借りて、夜に焼き鳥やお寿司を配達してもらい、お酒も飲みながら開催した。けれども、酔いに任せ勢いが過ぎて公的な施設からクレー

ムがつき、致し方なく外部の飲食店で、夜だと高いので昼に開催できるジンギスカン宴会に移行したというのである。「メンバー交流会」でおさまらない言葉たちが、昼に「我らが主張大会」という形の企画を求め、その勢いが夜の交流会にまで続いたということなのだ。

さらに理事長は、「結局僕らは単なる作業所じゃ収まらなかったんだ。利用者、に収まらなかった。利用客のままじゃ、モノが言えない。」と続け、患者会である北海道精神障害者回復者連合会の会合に遠路遥々道北から当事者2人を迎えた時のエピソードを教えてくださいました。どちらも当事者であったにもかかわらず、一方を健常者だろうと思いついて驚いたというのである。遠方ゆえなおさら当事者は健常者に連れられてきたのだらうという先入見に、とうの当事者が囚われていたということであり、かつ連れ立って来ることのできる仲間の力に励まされたのだらうと惟う。

「すみれ」ではかつて、現理事長の主治医黒田医師が聴き手となり、語り手を「おさかな」と称した「黒田先生を囲む会」なるものが、開催されていた時期がある。筆者は、テープに録音されたとある回の音声を聴いたことがある。それは、筆者が「聴き手」に代わり、「語る会」をあらたに開催するため参考にせよと渡されたカセットテープであった。「語る会」は、会員の突然の死に幾度となく晒されるなかで、「仲間の生き様からともに学ぼう」という理事長や会員の呼びかけによって企画されたのだった。かつて聴き手となっていた黒田医師（故人）は、別報として報告した森氏（仮称）にも登場する、北海道立精神保健衛生センター所長を歴任した医師である（松田2020）。

前置きが長くなったが、黒田医師の聴き方に対する筆者の印象は、教え導くわけではなく、かといって柔らかな穏やかな傾聴ではなく、力強い傾聴と尊重と単刀直入な問いかけによる率直なやりとりが強く記憶に残るものだった。

振り返れば、このときのカセットテープに録音されていた言葉も、そして現在紡がれている「語る会」の言葉も、仲間へ、目の前のあなたへ向かっていた。森先生が道内保健師を対象とした研修会に、「すみれ」の会員が同伴し、自身のことを語りかけていたことも同時に筆者は思い出した。

理事長は、札幌市が開催を重ねていた「こころの健康祭り」で「すみれ」が中心になって企画し演じた朗読劇も思い出された。当時、演劇経験のある会員がいてシナリオを書き、稽古をつけ、舞台にたった。朗読劇では、入院生活・保護室の経験を淡々と突きつける内容もあったと筆者は記憶している。「こころの健康祭り」は大きな会場を借りて開催された年もあるが、パタリと閉じられ、以後開催されず一過性のイベントに終わっている。おそらく精神保健福祉センターや保健センターが役割を終えたという理由でデイケア機能（社会復帰学級といわれていたところもある）が閉じられていくのと時を同じくしており、予算が付かなくなったことに起因すると推測される。とはいえ「朗読劇」への予算はゼロで、黒田医師にカンパをお願いしたさいには、いたたまれず奥様が財布の紐を緩めたのだと理事長は漏らされた。「朗読劇」は、舞台装置はなく、白いTシャツを揃えて皆舞台に立っていたことを筆者は記憶している。結局、カンパしてもらったお金は、打ち上げで飲み食いして使い果たしたらしい。

「朗読劇」の企画は、たまたまそれを可能にする才能を持った人たちが「すみれ」に集まっていたことによりふわっと浮上し可能になったもので、その発信は不特定多数にむけたものであった。まさに当事者運動が活発化し結実していく時代的なうねりに連動していた。しかし、

この企画は継続されることはなかった。

一方、「すみれ」において語ること・綴ることは止むことなく続いている。振り返れば、言葉を媒介に表現することのみならず、描画や音楽や演劇など「すみれ」には止むことなく自分を表現する機会が開かれていたように思う。語ること・綴ることは、そのなかでも大切にされてきた活動なのであろう。そして、繰り返しになるが「すみれ」において継承され今に息づく語ること・綴ることへの活動とその言葉たちは、表現せずにはいられずに溢れ出し、他の誰かに差し出されていたように思われる。

筆者は、こうして長年に渡って継承されてきた言葉たち・物語に触れていることを自覚し、聴きとり、論文の形でこれを読者の一人ひとりに届けることができればと思っている。

2.5. 高倉さん（仮名）と私[†]の出会いから調査を依頼するまで

今回のインタビューに協力してくださった方は、高倉さん（仮名）である。

高倉さんは、前節で紹介した「すみれ」にいつもにいる。そして、私は「すみれ」にときどきくるお客さんである。私はケア実践の場を意識して「すみれ」に身を置いているわけではない。馴染みの客といったところである。高倉さんは、この馴染みの客である私をいつももてなしてくれる。高倉さんは、いつも誰かのことを案じているようで、同じく案じているだろう私の思いを汲み取るように、私の顔を見ると誰かの消息を必ずといっていいほど私に伝えてくれる。「〇〇さんがね、骨折って入院した。今日、これから見舞いに行くの。」という具合に。「すみれ」の行事予定や出来事を、私が来室して一息つく間もないタイミングで教えてくださる。そして週末行事に私を誘ってくれたりもする。時に昼ごはんメニューが楽しみだったり、おすすめの日があったりすると、また、私を誘ってくれる。他の利用者がやれやれ、という顔をしても一向に構わず、私に世話を焼いてくれる。無骨だけど、カンがよく決して鈍感ではないことが察せられる人だ。昔、恋心を抱いていたらしい病院ケースワーカーの消息を私に尋ねるといのは、ルーティンになっている。おつきあいしていた彼女とのデート予定やプレゼント話もオープンに伝えてくださっていた。とにかく、高倉さんは、小さなことにはこだわらず、その肩肘はらないおおらかさと気さくさは、なかなか他にはいない存在感を放つ個性として私の目に映っている人だった。

でもその一方で、自分の心のうちをしんみりと打ち明けるようなことは、滅多にない人でもあった。ある日、高倉さんは静止画面のごとく、じっと十円玉を3枚重ねて指で挟んだまま見つめ続けて止まっていた。私が「どうしたの？」と声をかけると、ふわあっと笑って「いやあ〜」というだけだった。近くにいた人が「十円玉見てたって、お金増えねえぞー」とチャチャをいれてもとくに言葉を返すこともなかった。

「すみれ」について先に紹介したように、語ったり綴ったりして経験を発信する機会はいくつもあるのだけれど、高倉さんがそこに登場したことはない。それだけに、朴訥でごまかしのないその姿から生きざまを学びたいと思わせる魅力を持っていたのが高倉さんだった。高倉さんは、大柄で声がでかいので存在感がある。そして実は、先のエピソードのようにお金のやりくりには苦労があるらしい。また着替えやお風呂に関しては無頓着らしく、「すみれ」にいる

[†] この節以降、筆者の表記を「私」とする。

周りの人は、そんな高倉さんを放っておけず、心配をし、直球すぎるように私には感じられるようなやりかたで助け舟をだしている。高倉さんがそれをどのように感じているのかは、知る由もない。

食後、作業机を拭く仕事が高倉さんの毎日の仕事にはある。そのようなわけで、いつもいる人なのだが、「あれ、今日はいない？」という時もたまにある。そういうときは、たいがい、外の喫煙室で大きな咳き払いをしながらタバコを吸っていたり、診察日で不在だったりするときだけである。そういう意味でいつもある「すみれ」の安定感をさりげなく創り出している一人であるように私には思える。

高倉さんへインタビューを初めてお願いした時には、「いやあ、いいよ。」と最初は断られた。でも、少しだけ粘って、お願いして承諾してもらった。調査依頼書は事前に渡していて、「作業が終わった10時過ぎからだったらいいよー。11時ごろからご飯だから。」と約束を取り付けた。高倉さんの中には、動かしがたい1日のスケジュールがあるようなのだが、そこに割り込ませていただいた訳である。先に手渡した調査依頼書を、高倉さんはしばらく読んでいたけれど、結局なんの質問もなくその場は過ぎ、インタビューを迎えることになった。

3. インタビュー結果

インタビューをお願いしようと思った日、「すみれ」に到着すると、ちょうど定例のミーティングが開かれている最中で、作業はない日だった。ミーティング中だったので、部屋にはいったときに目で高倉さんに挨拶をすると、高倉さんは、すぐに私の意向を察して、目で挨拶を返してくださった。そして、ミーティングが終わると、「いいよ、今日」とすぐに、声をかけてくださった。申し訳なさが少しだけ軽くなる一声だった。私は、心からお礼を言った。でもそういういながら、高倉さんは、タバコに手をやっていた。「一服してからね。」と一言、言い終わるか終わらぬ感じで、すすすつと足早に、高倉さんは、建物を出て、外に設置されている喫煙室に向かっていった。そのあり方が、私にとって、とてもありがたかった。

まずは、調査依頼書をもう一度説明する心づもりでいた私だったが、高倉さんは、一服が終わって、席に着くと、早速、話し出そうとしていた。頑張って、先手を取って、説明をと、「精神障害をいかに生き抜いているのか、いやあ、生き抜いているわけじゃないってこともあるような気がするし、、、」ってことを説明し始めると、高倉さんは難しいねえーと言い、「そうなの、だから、もうちょっと、具体的に尋ねると、、、」とさらに私が説明しようとする、高倉さんは、すぐに、「精神障害者同士じゃないとね」、と話し始めた。ああ、同意書の説明もあるけど、、、でも、もう、話そうとしてくれているのだから、このままインタビューを始めようと、私は腹を決めて、でも、とにかく、録音だけは許してもらわねばと思ってお許しをもらった。スイッチを押すか押さないかのうちに、高倉さんは、すぐに話し出した。

以下、まとまった分析データの引用は前後に1行空けて示す。また、私の発言は〈 〉、高倉さんの発言は「」、発言中に引用される他者の発言は『 』、発話の最中の聴き手の短い相槌などは（ ）で表記する。

3. 1. 精神障害者同士じゃないとね

高倉さんの第一声は、「精神障害者同士じゃないと、あんまり助け合えないんだわ」だった。

私は、この言葉に面食らった。何を受けての返答だったのかつかみきれなかったのだ。「健常者は、まだ、あのーあれがあるからさ」と言いながら、もう一度、第一声のフレーズを繰り返し、「それが、何ちゅうか、あんまり良くない点だね。」と結んだ。

真意をつかむための私からの問いはどれも的を外していた。高倉さんは私の言葉を遮るように「親も、おふくろ亡くなったから」と言葉を繋いだあと、

「友達ってても、同じ精神の病気している人が多いから。(うん) 健常者の友達って、俺、あんまりいないからさ。(うん) だから、精神障害者同士で助け合いしかないからさ。(うんうん) それがメリットだね。(いやあああ)。うん。」

「メリット」は、同じ病気同士だから「わかりやすいっていうかあ、理解しやすい」。「あんまり良くない点」は、多分その後に出てきた「偏見」だ。つまり、冒頭の「あれがあるから」の「あれ」は偏見だった。＜暮らしやすいのかな？＞という問いには、「満足するしかない」、「それで我慢するしかない」だった。

「我慢」についてももう少し言葉を足してもらおうよう私が尋ねていくと、高倉さんはいつもの癖で、手のひらで左目を覆い、指と指の間に右目を覗かせながら、「やっぱり、あれかなあ、同じ、病気してるから、理解してくれるのも結構早いし、(うん) で、健常者っていうのは、偏見があるからさー(うん) だから、付き合いづらいんだわ」と言い、「すみれ」に来たら、相談しやすいからさ、と語り継いだ。そして「それくらいしかないわ、それ以上、応えれないわ」と返ってきた。

これでインタビュー終了と言われてしまったようなものだったけれど、私は分からないまま捨て置かれていることがあまりにも多すぎた。懇願するような気持ちで私は二の句を継いだ。

＜あー、十分、その話が、すごい、膨らんでいくような気がしていて、、、もうちょっと聞いてもいい、、、(うん) そこらへん、、、そっか。その、、、今の話は、要は、病気のことが伝わりづらい、わかってもらいづらい人もたくさんいるんだあっていうこと、(あーん) そこらへんが、我慢の部分ですか？ 我慢、何を我慢しているのかなあって、って思って。わかってもらえないことを我慢する感じ。＞

「うーん、そうだね。」

＜あー。偏見って、どんな時に、具体的に。＞

「いやあ、今でも偏見ってあるでしょ。(うーん) 精神病患者への偏見ってあるっしょ。(うーん) だから、」

＜肌で感じる、あの、何か、エピソードってありますか？＞

「いや、それはないんだけどさ。(うんうん) バカにされるわけでもないんだから、それはないんだけど。(うんうん) 偏見があるから、やっぱり、付き合いづらいね。」

「すみれ」は、当事者からの発信を積極的に取り組んでいる団体で、自らの経験をまとめて、演題に立って発表したり通信に掲載したりする機会が幾度となくある。だけど高倉さんはそうした機会に乗ることはなく、苦手だし発言もしない。一方で聴衆としての参加は欠かさない人

でもある。普段から、同じ病気の仲間とのつきあいを大事にする人なのだ。

仲間が入院したときには、お土産持ってお見舞いに行っていることを私が話題を展開すると、高倉さんは「それは、礼儀だと思うから」と言い、相手の好きなものを聞いて、みんなでお金出し合ってコーラ買ったりパン買ったりして、「ちょこちょこっとな、食べたいもの」持っていくことを話してくださった。「なんかあったとき、助けてくれる時も、気軽に助けられるしさ」、それは「すみれ」では、大抵、みんなやってることなのだ。

2回目インタビュー時に、もう一度この辺りについて、く同じ仲間で、だから、ああ、助かったなあ>と思えたエピソードを私は尋ねた。そうすると、「食事、お金ないとき、食事御馳走してもらったりさ」と話しだし、生保（生活保護のこと）出たとき、年金（障害年金のこと）出たときに奢ってくれたり、奢ったり、とにかくお金ないときにご飯にありつけたことを高倉さんは上げた。

2回目のとき、高倉さんはインタビューに気持ちを注ぎきれない様子が見受けられた。私の顔を見たときにまずは「クオカードさあ」だったし、話している最中も、お財布から硬貨をじゃらあ〜と出して勘定して、またそれを納めてチャックを閉めたり、空のコップに口をつけて飲む仕草をしたりして、おそらく、まさに今、高倉さんは、経済状態が悪くて、食べるものもタバコも我慢の真っ只中のようだった。それだけに、このときの「ご飯にありつける」には実感がこもっていた。

私が「助かった話」について高倉さんに尋ねても、「うーん、そう、どうかなあ。。。」と言い渋り、気持ちの面での支え合いを尋ねた日には「いやあ、わはっ、（難しいか）それは難しいよ」と返ってきたのも無理はなかった。高倉さんは、同じ病気の仲間と2人で賄い付きの共同住居に住んでいたり、院内の喫茶店の仕事をしたりしていた。私は、そんな経験を聞いていくうちに、くなんかあたりまえ、自然な感じがした。今の助け合いって>と伝えてみた。すると高倉さんは咳払いをしながら、「自然な感じだったもん」と言い添えた。そして、私が確認のため、もう一度、同じ病気だからく理解しやすい>と声にすると、高倉さんは「わかりやすい」と言い直した。

あとから振り返れば、高倉さんの「助かった話」は、そう、確かにわかりやすかった。

「我慢」についても、2回目はキッパリと「経済状態悪い時は、我慢するしかない、仕方ない」だった。確かにわかりやすい話である。それをそのまま受け取り満足せずに私は、しつこく質問をし、こじつけた理解をしようとした。そして良さげな感動話を引き出そうとしていた私に、高倉さんは本当につれなかった。

この時のやりとりはまさに、「理解しやすい」じゃなくて、「わかりやすい」が問われていた。「偏見」についても、まさに、バカにしているわけではない、けれど、健常者（私）はわかっていないということそのものだったことがあとから察せられた。

3. 2. 生まれ育った故郷の地と療養の地としての札幌

仲間に対して礼を尽くす姿に私は感心しながら聴いていると、高倉さんは「みんなやってるよ」と言ったあとに、4、5年前に84歳で亡くなった母親から、「お前は頑固」と言われていたことを思い出した。亡くなったのは、高倉さんが60か61...2歳の時だった。

お盆になると、母親のお墓参りに遠い故郷Aまで出かける話を、私は以前から聞いていた。

今回も自然とお盆のお墓参りの話になり、故郷Aの名前が上がった。

高倉さんの生まれは、道東の故郷Aとは別の地(故郷B)で、後に隣町に引っ越し、故郷A、故郷Dへ移動し、そのあとは札幌住まいだ。故郷Dで高校1年のときに、最初の入院をした。当初は、通院で治すつもりが3ヶ月の入院になり、高校1年は留年して2回した。札幌も、いい病院があるからおじに勧められて、卒業後に入院のために行ったりしたけど、また故郷Dに戻ったりの生活だった。薬が合わず具合が悪く、「注射で飯食ってた」。口が動かなくて、目は上がるし、注射を何回もしていた。札幌F病院で院長先生が内服薬ではなく、注射薬に変えてからようやく「精神が安定した」。

「それまでは、妄想もあったし、(うんうん) だから、具合悪くなるばっかしだった。(あーそうー) 先生が、あの一注射に変えてくれて、(うんうん) それで良くなった。うーん。だから、それまでは一、最悪。」

おそらく副作用が強すぎて効果ある薬が見つからなかったのだろうと想像する。病院を変え、入退院を繰り返していて、札幌F病院は10何年入院。働いてからも入院している。なぜかこのとき、高倉さんは、高校生の時を思い出して次のように話だした。

「うん。でもねえ、(うんうん) 高校生のときね、病気したからって、バカにされなかったよ。(そう) うん。されなかった。(ああそう) だから、1年生2回やったけど、(うんうん) バカにはされなかった。(へええええ) それが、(うんうん) それが自分にとってよかったなって思う。(それはそうだわあ) うん。」

このようにキッパリと語る高倉さんの姿はとても印象に残った。インタビューの冒頭で、健常者は偏見があるからつきあいづらいと言っていたけれど、いや、そうであるからこそ、高校生の時はバカにもされずよかった、なのかと思い巡らせながら、私は直接それを尋ねてみることにした。すると、高倉さんは、「俺はあんまり、直接偏見にあったことはないんだけど。そういうことは聞いてるから」と説明をした。

3.3. よくしてくれた親戚もいれば絶縁した親戚も

このあと、高倉さんとの高校時代の回想は、よくしてくれたおじさんの話に移っていった。高倉さんの出身高校でかつて先生をしていた人だ。母親が亡くなったあと、3年ぐらいしておじさんも亡くなったけども、お墓の場所も分からないのでお参りに行けない。弟とは絶縁状態。手でバッテンをしながら、全然連絡が取れず、従兄弟とも会ってないとのこと。

「だから精神病気したからね。うーん。冷たくなった。おふくろもあんまり、交際なかった。(中略) 4ヶ月後に分かったんだ、亡くなったの。。。。」

高倉さんは、母親のお葬式に出ていない。呼ばれなかったのだ。高倉さんの威勢のいい声のトーンがこのときは少し落ちて湿っぽくなったような気がした。母親が入院していた札幌の病

院に電話をかけたときに、高倉さんは亡くなったことを知ったのだ。

「何も親孝行できなかったのが、残念かなーって思っ。て。(そう、でしたか、,) だから、お盆ぐらい行ってやらないとさ。(うん) 墓参り行ってやらないと、(うん) 寂しがってないかなって思っ。て。」

「親孝行できなかった」はこのあと何度も繰り返された。5時間以上かけて高倉さんは故郷Aに毎年いく。

3. 4. 親父のアレで中学3年から弟と3人暮らしになる

中学3年のとき、高倉さんは両親の離婚を経験した。母親は、呉服店に勤めたりスナックに6年ぐらい勤めたりして、二人の子どもを育ててきた。高校のときに発病した高倉さんは、障害年金を1500円もらって「弟と3人で暮らしたんだ」と話した。しかし、二つ年の離れたその弟は、今や絶縁状態。「嫁さんもいて、子ども3人いるから。でも、これ(指でバツテンをして)、全然だめなの」。連絡先すら知らない。

高校1年のとき、高倉さんは「妄想。テレビが自分のこと言ってるって、それが病気だから」。最初は通院で治すつもりだったのに、3ヶ月の入院で留年することになったのだ。在籍していた高校は、進学校。中学のときは内申点がよく、勉強もスポーツも素行も先生の覚えめでたき生徒だったことが話の端々から窺われた。そして、もっと上の高校に行くように進学校を勧められたけど、「俺、勉強するの大嫌いだったから」「やめたっ」、と豪快に笑い飛ばした。

発病は高校で厳しいバスケットを始めたこと、故郷D東高校一の美人に振られたこと、両親が離婚したこと、「3つ重なって、病気になった」と高倉さんは話した。役所勤めで出世街道を上り詰めつつあった父親だったけれど、「浮気もんだったから」、「だから離婚したからさ、おふくろは苦労したと思う」。

「お袋はね、タバコも、お酒も、やらなかった。(あーそうううう) それから、おやじは、ビールちょこっとと、(うーん) あとはよく、あの一、家で、あの一麻雀。(麻雀っ) あの一、(職場の人呼んで。) あの一、役所の人呼んで、麻雀とかやってた。(中略) うん。でも、お酒はあんまり飲まなかった。(あーそう) ビールちょこっとくらい。(あーそう) で、田舎だからさ。(うんうん) 人口が昔、1万人ちょっと。

<ああ、じゃあみんな知れてるね>

「そうそう、だから、あの一、小学校の時、噂になっているんじゃないかなあって思っ。て、おやじのアレが、、、」

若い女の子と仲良くなってなかったら、父親はもっと偉くなっていたかもしれない。自分は、地元の道東E高校に行っていたかもしれない。でも、「馬鹿にされてるんじゃないのかとか、あーん。だから、街歩くのもちょっとね。(中略) 噂されてるかなあと思っ。て。小さい街だから、早いんだ。(中略) だから、嫌だったよ。」そう言いながら、高倉さんは「やっぱり、お袋が大変だったと思う」、一人で育ててくれてと、自分よりは母親を労った。そしてまた、親孝

行できなかった思いを繰り返した。

3. 5. 自分でも割り切ろうとして

「俺はそうでもないけど」と自分ではなく、母親の苦労に思いを馳せ続ける高倉さんは、小さな田舎街の父親の秘事にならない秘事に、小学生の時から心痛めてきた。

<まあ、そうなんだね。。。隠せないからね。>

「そうそう、すぐバレちゃうから。」

<ああ、いやあ、いやあ、小学生で、そんなことを、、、思ってたんだ。>

「あん、だから、嫌だったよ。」

離婚をして故郷Dに移り、一人で兄弟を育ててくれた母親に高倉さんは「あの一親孝行できなかったのが、一番ね」とまた呟いた。

私は、<いま、孝行してるよ、ちゃんと届いているって、思いたいなあ>と言わずにはいられず、<ズシーンときちゃって>と率直な思いを伝えた。それへの応答として、高倉さんは悟ったように以下のように語った。

「いやあ、誰も、やっぱり、なんちゅうか。一生にいろんなことあるでしょ。(うん、そうだね) あん、誰でもそうだと思うよ(ああ、そうだね) だから、まあ、仕方ないなって思うけど。(うーん) だけど、一人で不幸な人と、不幸でない人もいるけど、やっぱり、不幸の経験するでしょ。誰でもね。(うーんそうだね) いいこともあるしさ、(うーん) 悪いこともあるから、仕方ないのかなって思っちゃう。

<なんか、高倉さんの、今まで生きてきた道のりを聞かせてもらおうと、、、病氣、ってなんなんだろうね。なんだったんだろうね。なんなんだろうね。>

「いやあ、でも病氣して、く、、、苦にはなってないよ。(あーそう) 仕方ないって思ってるよ。自分が悪いと思ってるから。」

<ええええええ、どうして>

「ああ、自分が原因だって思ってるから。」

妄想は自分が原因だと高倉さんは言う。3つの原因はあったとしても、「結局、自分が弱かったからさ」と言って、「恨んだりもしてないし、親を。だから、仕方ないなあって思ってる」と結んだ。

実は、2回目のインタビューで私が、父親の秘事がバレるかもしれない恐怖を抱いていたとしたら、高倉さんのテレビの妄想は「納得がいくみたいなのがしちゃった」と伝えてみたのだが、そのとき高倉さんは空のコップを傾けて口をつけたあと、コツンと机におき、<ああ、そうか>とうなずいた。でも、反応はそれだけだった。

病気を「自分が弱かったから」と捉えている高倉さんに対して、私は、<なんか、割り切れて、、、るような感じにも伝わっちゃうけど、割り切れているって言っちゃっていいのか、、、す

ぐ、そうやって割り切れるものなんか。。。>と落ち着きどころを探るように尋ねた。すると、

「いや、自分でも割り切ろうとしてる。うん。」

キッパリとした言葉が返ってきた。

そしてまた、「おふくろがさあ、私が原因だとは言ってくれたけど、それは、ないと思うんだ」と言って、しわくちやになった左まぶたを手でこすりながら「やっぱり、親孝行できなかったからねえ」というところに落ち着きいた。

私がこの言葉の余韻を感じながら、確かめるように高倉さんの言葉を繰り返していると、「あとは？」と問いかけなおされた。これは、タバコタイムの催促でもあった。

そこでしばしの休憩を入れたあと、高倉さんは、喫煙室から戻り部屋に戻ってきた。

「先生、明後日、冷やしラーメンだよ。」

いつもの高倉さんと私の会話だ。高倉さんのメニュー紹介が始まる。ルーティーンに入ると不思議と私の側にも安心感が増す。そうやって雑談も交えながら、後回しになった同意書のサインをしてもらい、仮名については「いいよ、特定しても、本当のことだから」というのをなんとか了承してもらい、どうにかひと段落ついたとき、ふいに高倉さんは、「先生、俺でよかったのかい」と尋ねられた。

胸がキュンとなる発言だった。親がつけてくれた高倉さんの名前は、ご両親から一文字ずつもらってつけた名前で、偉い画家さんと同じでね、「名前負けだよ」なんて話もした。そしてやっぱり最後は、「親孝行したかったねー」で終わった。

<病気がなかったら、親孝行できたのになって思ったりしますか？>

「いやあ、それはないと思う。だから、病気してても親孝行はできたと思う。」

「そう、かあ」

空のコップを再び口につけて傾けながら、

くん。いいですう先生。もう。あん。>

「わかった。ごめんなさい。高倉さん、もう水もないし」

インタビューのための録音機器のスイッチを切ったあとも、高倉さんは、ご両親への思いを語り継いだ。母親の実家はお寺さんで、女学校卒だったこと。母親の家系は、医者が3人いたりしたけど、大正生まれの父親の方は高等小学校卒だったのもあって、結婚は反対されたりしいよ、と思い出話をした。いまだ、父親が今どうしているか、高倉さんは知らないままだ。

3回目にデータの確認をしたとき、文字起こしをしたデータを見て、「いやあ、先生、的確だねー」と高倉さんは感心し、お金勘定の場面では「ははっ、得意だからね」と笑い、締めは「〇〇さん、どうしてるんだろう」だった。

誰かのことに思いを馳せている高倉さんはいつも通りだった。

3. 6. 残された応答しきれていない感覚について

高倉さんは最初から最後まで厚意的にインタビューに応じてくれた。だけど、いざ始まると、タバコに気をとられたり、空のコップに口をやり水を飲む（水がないときはコップを傾ける）、お金をジャラーンと机に広げて、財布にしまい直したりだった。

私が何かエピソードを引き出そうとしても、いやあーと言って、うなつた後、何か具体的なエピソードが物語られないときもあった。今になって思えば、まさに割り切ろうとしていたのだが、そのとき、私はそれを遮り何か大きな深い物語を想像し引き出そうとしていた。それゆえに呈示された物語に私自身が満足せず、ゆえにフィット感が場面によって薄れてしまい応答しきれてない感覚が残るちぐはぐな会話ともなった。しかし、このちぐはぐさにこそ、高倉さんの生き抜く姿があらわになる場面があったのではないかと、今になって思う。

インタビューで高倉さんは無理をして合わせてくれていたようにも受け取れるし、いやはや、後になって考えてみると、いつも、何もなくても、こうやって高倉さんは「すみれ」で、そして私とも過ごしている人でもあった。

だからなのか、私は、時間を拘束してインタビューに無理に付き合わせてしまつて申し訳ないというような気持ちになり、終わりを告げるときに不意に「ごめんなさい」と言つてしまつていた。これも今になってみれば不自然なことだったかもしれない。

インタビュー調査のお作法に倣うことと、高倉さんという存在を尊重することとの矛盾も感じさせられた。固有名詞の匿名化は大前提であるのだが、仮名にされること（アルファベットでも）は、ご両親の名前を一文字ずつ受け継いだ高倉さんにとっては違和感があつたに違いない。何度も、名前は本名でいいといい、匿名化についても、「いいよ、特定しても、本当のことだから」と話していた。さらに付け加えると、高倉さんは仮名にすることをお願いしたとき、「でもバレないかい？」と尋ねた。本名にすることに対して「バレる」ことを心配するのではなく、仮名にするその偽りこそが、高倉さんにとっては隠し事であつたのだ。これはすなわち隠し事が露見することへの恐怖に容易に結びつくものだったのかもしれない。彼は、父親の秘事がバレることを案じる小学生だったことと妄想との連なりを思い出すとき、はっとする問いかけだった。

ここまで読んでいただいたように、調査者は、お作法に倣つて仮名を採用した。だが、これは真の名前を剥奪することにもなる。研究協力者にとってそれは偽りの自分を晒すことであり、己の誇りを削がれるような、名を偽つたという秘密が保たれるかどうか案じる不安を喚起させてしまうような体験にすらなることを教えられた。インタビュー調査においてこの問題にどう応答したら良いのか、すっきりと言葉にできぬままである。しかし、現時点において「仮名とする責任は、調査者にある。」、この一言は言い添えておきたい。

4. 考察

4. 1. 高倉さんの物語をたどる

高倉さんにとって、自身もそして相手が精神障害者であることを意識することは、助け合いや互いのわかりやすさがもたらされるメリットであることが最初に語られた。一方で、偏見を持つ健常者は付き合いづらいという意識も言葉にされた。

バカにされるわけでもない、けれどわかってもらいにくさが意識されるとき、それを高倉さ

んは偏見という言葉で表現していたようにも感じられた。相談しやすさ、助け合いやわかりやすさという精神障害者同士のスムーズな応答性に対して、インタビューの場で起きた的外れな私の問いは、まさに高倉さんのいう偏見がじゃまをしていた証だったのかもしれない。

つまり「理解しやすい」じゃなくて、「わかりやすい」と感じられる応答性が問われていて、バカにしているわけではないけれど、健常者（私）はわかっていないという「偏見」がこの場にも横たわっていたのだった。

冒頭10分ぐらいで高倉さんの物語は「それ以上、応えれないわ」、になり終わってしまいそうになった。けれど、その後、気軽なわかりやすい助け合いのエピソードに話を向けると、惹きつけられ感心する私との会話が展開した。とくに、お金ないとき奢ったり御馳走してもらったりする話はリアルに伝わってきた。

この話が、ひと段落ついたときに、なぜか高倉さんは、母親に言われた一言を思い出した。「お前は頑固」である。振り返ってみれば、冒頭から高倉さんの大きな物語は、世話になった母親への追憶とできなかった親孝行が軸になっていたことに気づかされる。高倉さんの母親は4、5年前に84歳でなくなっている。高倉さんが60か61...2歳の時だった。

高倉さんは、生まれ育った故郷の地と療養の地としての札幌を行き来する時を過ごしていた。高校1年のときに最初の入院をして以来、入退院を繰り返し、一番長い入院は札幌で10年に及ぶものだった。札幌へは良い医療を求めての転入であったが、そのあとの入退院も故郷のある道東との行き来のなかにあった。何より自分に合う薬が見つからず、副作用ばかりがきつく経験されていて、口を開けて咀嚼することすらままならない状態が続いていたという。「注射で飯くってた」という矛盾も、医師の処方注射薬が変わることで、ようやく精神の安定を得た。「それまでは一最悪。」という言葉には、薬に翻弄される日々が目に見えようだった。しかし、高倉さんは薬のせいで、処方が悪くて、妄想のせいで、という物語を一切綴らなかった。

むしろ回想のなかで、高倉さんは、高校生のときに退院して復学したあとでも、バカにされなかったことを「自分にとってよかった」と振り返った。私は、やりとりのなかでまなざされる偏見を意識した発言のように当初受けとめ、尋ね返したりもしたけれど、これまた、的外れもいいところであった。

高倉さんは恨み辛み物語を一切綴ることがなかったのだ。

次に出た話は、病気してからよくしてくれたおじさん、病気してから冷たくなった弟、親戚、亡くなって4ヶ月後に病院職員から知らされた母親の死についてだった。このような別離の物語すらも、高倉さんは親孝行できなかったという悔いで締めくくり、恨み辛み話にできなかった。

父親との別離は両親の離婚だった。中学校3年のときで、原因は父親の浮気。高倉さんは小学生の時から、その父親の秘事に気づいていて、バカにされていやしないか、噂になっていやしないか案じていた。

本人曰く発病の原因は、両親の離婚と失恋と厳しい部活だった。「テレビが自分のことを言ってる」という妄想は、私には父親の秘事がバレるかもしれない恐怖とつながっているようにも感じられたけれど、それをそう伝えたところでさほど高倉さんにはフィットすることもなかった。そして、苦勞した母親を勞い親孝行できなかった思いへと立ち戻る物語が以後も綴られていった。

高倉さんは、生きていくなかで経験する精神障害に対してどう処してきたのか。それは、『一生に誰でもいろんなことがあって、不幸な経験はあるものだから仕方ない』といって『割り切ろうとする』ということのようだった。自分が原因だし、弱かったからだと言い切る高倉さんは、生きていくなかで経験する病気・精神障害を苦労の原因にはしていなかったのだ。それは、一生のうち誰にでもある苦労だから仕方ないという処し方である。高倉さんは、生きていくなかで経験する精神障害を、誰かれ恨むことなく原因を預けることなく自分で引き受けていこうと処していたと言えるだろう。

〈わりきれものなんか。。。〉

「自分でも割り切ろうとしてる。」

高倉さんの言い換えの意図を今一度問い返さねばならないだろう。

「病気してても親孝行はできた」と言い、親孝行できなかったことを悔いる思いは、インタビューの最中ずっと通奏低音の如く響きわたっていた。きっとこの思いは、この先も続くのだろうし、そう思い続けることこそが、高倉さんにとって親なき後を埋めて生きていく姿の現れのようにも感じられた。これは母親を看取することもできず、死を知らされることもなく、身内とともに悼むこともできない、いわば「曖昧な喪失」ゆえに生じる、エンドレスな喪の作業と言い換えられるのかもしれない。

インタビューの冒頭、私は高倉さんの言葉に応答し切れていない感覚を抱き戸惑っていたが、中盤以降はそのちぐはぐさが薄れ、最後の最後にそれでも付き合わせてしまいごめんなさいという思いが不意に私の心の中に沸き起こった。全体を通して振り返ると、高倉さんは、インタビューの冒頭、私が応答し切れていない感覚を抱いていたことに対しても、ケアをしてくださっていたのかもしれないと今になって思う。

4. 2. 高倉さんはいかに精神障害を生きてきたか

前述の通り、高倉さんは互いにわかりやすい仲間として精神障害を意識しており、いかに精神障害を生きてきたかについて、『一生に誰でもいろんなことがあって、不幸な経験はあるものだから仕方ない』といって『割り切ろうとする』生き方をしていた。原因を自分に帰結させる高倉さんにとって、生きていくなかで経験してきた精神病・精神障害は、苦労の原因ではなかった。たしかに、入退院を繰り返した年月や薬があわなくて食事のままならない経験は高倉さんの人生に大きな影響をもたらしたといえる。しかし、高倉さんはそれも、一生のうち誰にでも幸せなことがあるように、苦労だってあるのだから仕方ないと処している。受けてきた医療、親兄弟、親戚、母親の死に関わる回想は、自分以外の誰かに矛先を翻し、恨みを連ねてもよさそうなエピソードにも思えた。しかし高倉さんの口からは恨み辛み物語は一切綴られず、何度も何度も立ち戻る親孝行への悔いへと収束した。できなかった親孝行は病気が奪ったものではないと断言する高倉さんは、繰り返しになるが、生きていくなかで経験する精神障害を、自分で引き受け割り切ろうと処していた。

唯一、この処し方ではおさまらない経験、それが父親の浮気だったのかもしれない。父親の浮気だけは高倉さんの所与のものとして、自分で引き受け割り切りようもない経験だったのではないだろうか。父親を責めてもよいだろうに高倉さんはそれをしない。そう考えると、テレビが自分のことを言っているという自らが不特定多数の人に暴かれてしまう妄想は、家族や人

との絆が断たれてしまうような恐ろしい事実が暴かれていくかもしれない恐怖を置き換えているようでもあり、父親の秘事の暴露を小学生の頃から怯え案じる思いにつながるような連想が膨らむ。テレビの妄想は、自分で引き受け割り切りようもない経験を自分で引き受け（自分が弱い）、自分に閉じて割り切ろうとする高倉さんらしい対処の結果なのかもしれない。

〈病气って何なんだろうね〉の問いかけに応じる高倉さんの言葉をなんども頭の中で再生してみる。私がいくら高倉さんらしいと前述したようなことをいったところで、両親の離婚、失恋、厳しい部活、3つの不幸に対して自分は弱かったから病気になったという高倉さんの物語は不動なものようだった。聴き手には慰めの余地も残さなかった。

しかし、この物語の中心には高倉さんがいる。病气や精神障害は中心にのさばってはいない。母親に「お前は頑固」といわせしめたゆえんも、もしかしたらここにあるのかもしれない。高倉さんは、精神障害を生きているのではなく、高倉さんを生きている。

小澤勲（2010）は認知症を生きる不自由において、物取られ妄想を救助信号と捉え、妄想ではじめて被害者になれる、「わたし」を保つことができるという物語を読み込んでいる。さらに「事態を自己の責任と捉えることの困難」が妄想という表現形の発見を可能にすると述べている。

この物語は、高倉さんにも置き換えて考えることができるのかもしれない。父親の浮気を子どもの責任と捉えることは困難であろう。自分で引き受けきれなかったこの不幸な状況が、妄想という表現形の発見を可能にしたと言えるのかもしれない。踏み込み過ぎた捉え方かもしれないが、己を貫く生き方をまっとうする・保つという意味で、高倉さんにとっての精神障害は、生き抜くうえの安全弁としての表現形であり、己と他者（環境）をつなぎとめる方略であったのかもしれない。

4. 3. 応答せずにはいられない高倉さんの生きられた経験から学ぶケアの視点

高倉さんの生きられた経験には、応答せずにはいられないエピソードがたくさんあるし、お金勘定の仕草をみるにつけこちらとしては経済状況を案ずる気持ちがくすぐられた。同時に、応答せずにはいられないというより、いくら応答しようとしても、不動の物語に跳ね返されそうにも思えた。すべて「自分が悪い」、と引き受けているからである。

一方、高倉さんが思い出してくださった助け合いエピソードは、実にわかりやすいものだった。仲間が入院すれば、好きなものをお土産にしてお見舞いに行くことだったり、お金がなければ奢ってもらったり、ごくごく自然なあたりまえの助け合いだった。こうした行為そのものが専門家としてのケアに上げられることはまずないだろう。

健常者のアレ、「偏見」については、「理解しやすい」じゃなくて、「わかりやすい」と感じられる応答性が肝であることも、ちぐはぐになってしまった冒頭のインタビューを振り返る中で導かれる教えであった。

ここから学ぶことは何であろうか。

「当事者同士じゃない」という言葉は、様々な場面で耳にしてきた。私の限られた経験のなかでは、それは経験した病気の苦しさそのものを指す場合もあれば、置かれた境遇を指す場合もあったりした。私はこの言葉の裏に排他性や非当事者にむけた拒絶を感じてきた。しかし、今、あらためて高倉さんの生きられた経験をたどることで、別の学びが得られたように思っ

いる。私が感じてきた拒絶は当事者が浴びせられてきた拒絶の投影だったのかもしれない。一方、高倉さんが話してくださった自然な助け合い、わかりやすさはなによりつながりの確かさと呼応関係の心地よさだった。高倉さんは、このつながりを家族や親戚からかつては得られていたにもかかわらず、やがて疎遠になり、死別という区切りすらつけがたい「曖昧な喪失」を経験していた。それゆえ「当事者同士じゃない」という呼応関係の心地よさに尽きる生きられた経験が際立ち語られたのではないだろうか。

ここから学ぶケアの視点は、なにより、その原点ともいうべき応答責任を教示しているといえるだろう。

「理解しやすい」ではなく、「わかりやすい」、「割り切れるもの？」に対して、「割り切ろうとしている」という高倉さんの切り返しはケアの視点を読み砕くうえでも、示唆深い。

それは、「分かる」ために「分ける」という納めかたであり、まとめかたにみる対処である。まとめるために「分ける」（割り切ろうとする）対処ということだろうか。中井（1998）は最終講義のなかで、「分裂病（ママ）には自分が唯一無二の単一人格でありつづけようとする悲壮なまでの努力がありありと認められます。何を措いても責任だけは我が身に引き受けようとする努力です。」と述べている。高倉さんもまた、我が身に引き受けて単一人格であり続けようとするために、割り切れないことを妄想へと押し出し、割り切ろうとする努力をし続けているのかもしれない。きちんと別れることができなかった曖昧さに対しても、割り切れないのに割り切ろうとし続けているかのようである。

ケアの担い手は、このような方に、なにができるであろうか。いまだ充分な言葉がみつからない。

5. おわりに

本調査事例研究は、「精神障害を生き抜くとはいかなることか」を多様性にひらく」第1報2報に次ぐ、第3報として記した。今後も地道に多様な物語の収集に努めていきたい。また、今回調査事例研究法におけるデータ収集方法としてのインタビュー（面接）技法について記すことができなかった。これも今後の課題としたい。

引用文献

- 安達克己（1983）デイ・ケア医療-患者との関わりを中心に北海道立精神衛生センターにおいて-。「おなじ」がわかりあえるということ，自費出版，54-56.
- 安達克己（1983/初出1974）作文という作業場面をとおしてみたある分裂病者の成長過程-精神科作業療法における作業分析を考える-。「おなじ」がわかりあえるということ，自費出版，48-51.
- 土居健郎（1992）新訂 方法としての面接. 医学書院，49-52.
- HSK「どっこい俺らは生きている」パート3-すみれ会30周年記念誌-（2000）
- HSK「どっこい俺らは生きている」パート4-すみれ会40周年記念誌-（2010）
- HSK「どっこい俺らは生きている」パート5-すみれ会50周年記念誌-（2020）
- 中井久夫（1998）最終講義. みすず書房，93-94.
- 松田康子（2019）「精神障害を生き抜くとはいかなることか」を多様性にひらく第1報-にいちゃ

んへのインタビューから－. 臨床心理発達相談室紀要, (2), 67-90.

松田康子 (2021)「精神障害を生き抜くとはいかなることか」を多様性にひらく第2報－さくらさんへのインタビューから－. 臨床教育学研究, Vol.9, 印刷中.

松田康子 (2020)「精神障害を生き抜くとはいかなることか」を多様性にひらく-別報 もう一つの「夜明け前」-. 臨床心理発達相談室紀要, (3), 49-70.

小澤勲 (2010) 痴呆を生きるということ. 岩波新書847, 292-295.

謝辞

本事例報告をまとめるにあたり、調査にご協力くださった高倉さんとNPO法人精神障害者回復者クラブすみれ会に心より感謝申し上げます。

Abstract

This study is 3Th report and poses the question “how does a survivor’s story mean to individuals who have experienced mental health issues, trauma, and extreme states?” The case study of Takakurasan, a survivor, who experienced mental health issues, trauma, and extreme states was explored here. An informal interview was conducted with Takakurasan to explore perspectives of caring to respect differences and recognize diversity through the unique lived experience of an individual. Therefore, the purpose of the study was to discover narratives of being unable to be without caregivers’ responses. The way of Takakurasan’s life was trying to divide. He said it can’t be helped because everyone has unhappy experiences and difficulties during their lives. He told the obstinacy story to attribute the cause of his illness to his weaknesses. His lived experiences with mental health issues seems like to be a strategy to sustain himself and continue reconnecting to other environments. Furthermore, it appeared that the core of caring may be a responsibility as to be not able to understand each other unless peers.